

△資料▽

一万石大名の城下町についての一、二の資料

中 島 義 一

一

一万石級の小藩の城下町研究の意義目的については第一報①に述べた。第一報は全国的展望ないしは予察であり、第二報②において補った。その後第三報③④として個別的記載を発表中である。本稿はこの問題⑤考察について若干の資料を提示しようとするものである。

二

最初に一万石級小藩の成立事情を検討してみる。お断わりしておくがこのような大名の戸籍調べのような事を地理学だの歴史地理学だのと考えているわけではない。頭書の問題を考える基礎として考察の必要を感じたまでのことである。

(A) 中以上の藩の分家

数からいえばこれが一番多い。これを(イ)本藩と近接しているもの、(ロ)本藩より遠く離れているもの、(ハ)本藩はほろび支藩だけが残ったものに三分する。二六〇余年の藩政時代を通じて二人以上の男子を持った場合は数多かつた筈であり、その処理法としては支藩を立てる、藩内で分家する、宗家の家臣となる、他家の養子にするの三つが考えられる。ではどのような場合支藩を立てることができたか。いろいろ複雑な事情があったようである。六万石の大洲藩(加藤氏)が一万石の支藩(新谷)をもち、五・一万石余の丸亀藩(京極氏)も一万石の支藩(多度津)をもっているのに二十五万石余の徳島藩(蜂須賀氏)や十五万石の高田藩(柳原氏)には支藩がない。

(イ) 本藩と近接しているもの

支藩	黒石	七戸	米沢新田	実戸	三根山	野村	福本	荻野山中	清末
国名	陸奥	陸奥	出羽	陸奥	越後	美濃	播磨	相模	長門
藩主	津輕	南部	上杉	松平	牧野	戸田	池田	大久保	毛利
本藩	弘前	盛岡	米沢	水戸	長岡	大垣	鳥取	小田原	山口
同石高(方石)	一〇	*一三	**一四	三五	***二	一〇	三二	三七	三六
支藩	母里	千束	多度津	三池	高知新田	足利	鞠山	新谷	
国名	出雲	豊前	讚岐	筑後	土佐	下野	越前	伊予	
藩主	松平	小笠原	京極	立花	山内	戸田	酒井	加藤	
本藩	松江	小倉	丸亀	柳川	高知	宇都宮	小浜	大洲	
同石高(方石)	一八	一五	一五	一一	二四	一〇	一七	一六	

* 削封前は20万石 ** 削封前は18万石
 *** 削封前は7.4万石

(ロ) 本藩より遠く離れているもの

これには当初は本藩付近に成立した支藩が本藩は動かさず支藩のみ転封して遠隔地になったものがあり、柳川の立花

氏の支藩三池が文化三年奥州伊達郡下手渡に移されたものと下野の高徳藩（宇都宮の戸田氏の支藩）が下総の曾我野に移った場合を例にあげる。前者は明らかに左遷である（明治元年三池に戻る）。

逆に本家が転封になり、支藩だけが残って遠隔になったものもある。下妻藩（井上氏）の成立当時本家は笠間藩主だった（後の浜松藩、廃藩時は上総の鶴舞藩、六万石）。磐城の湯長谷藩（内藤氏）も成立当時は本家が平の藩主だった。

本家・分家共に転封になり本家の転封先に新田がないので両者が遠く離れたものに柳沢氏がある。享保九年本家は甲府より大和の郡山に移り、二つの分家は越後の黒川と三日市に移った。

他に左記のものがある。

支藩	峰山	豊岡	加知山	七日市	茂木	宮川
国名	丹後	但馬	安房	上野	下野	近江
藩主	後京極丸	京極丸	酒井小丸	前田金	細川熊	堀田佐
本藩	亀	亀	浜亀	沢	本	倉
国名	讃岐	讃岐	若狭	加賀	肥後	下総
支藩	佐野	糸川	館山	山崎	安志	
藩名	下野	越後	安房	播磨	播磨	
藩主	堀田	松平	稲葉	本多	小笠原	
本藩	佐倉	福井	岡淀	岡崎	小倉	
国名	下総	越前	山越	三山	豊前	

(ハ) 本家がほろび支藩だけが残ったもの

森氏は本家（津山）がほろんで分家（播州三日月）が残り、堀氏は越後で四十五万石の大藩だったが幕末まで残ったのは村松（三万石）・椎谷（一万石）・飯田（一・七万石）・須坂（一万石）の小支藩であった。

(B) 名家の跡

中世ないしは戦国期の名家の跡がこのクラスの小藩として僅かに家名を伝えたものである。たとえば下野の喜連川
 の喜連川氏は足利氏の一門（古河公方）の子孫であり本高五千石ながら大名の列に入り、仙台の伊達家も参勤交代で
 喜連川通過の際は敬意を表したという。河内の狭山の北条氏（小田原北条氏の後）、大和の芝村・柳本の両織田氏（有
 楽斎の子孫）、但馬の村岡の山名氏がある。

(C) 譜代の小藩

三河以来の旧臣で宗家がこのクラスの大名になったもの。武州金沢の米倉氏、常陸竜ヶ崎の米津氏（武州久喜、出
 羽の長瀬、上総の大網を経て竜ヶ崎に移る）、下総生実の森川氏、同国小見川の内田氏、上総一宮の加納氏、大和柳
 生の柳生氏、河内丹南の高木氏、和泉伯太の渡辺氏、摂津麻田の青木氏、常陸牛久の山口氏等がある。

(D) 外様の小藩

戦国大名または豊臣氏の旧臣等がこのクラスの大名として存続したもの。下野大田原の大田原氏、同じく黒羽の大
 関氏（この両家は那須の一族である、大和田原本の平野氏、伊勢菰野の土方氏、濃州苗木の遠山氏、常陸麻生の新庄
 氏、三州田原の三宅氏、大和小泉の片桐氏、常陸志筑の本堂氏、播州林田の建部氏、同じく小野の一柳氏、備中成羽
 の山崎氏、豊後森の久留島氏等がある。

(E) 親藩の小藩

前述の水戸・福井・松江等の支藩以外に滝脇（松平）氏（駿河小島より転じて上総桜井藩）・大給（松平）氏（三河
 伊保より転じて信州田野口）がある。

(F) 江戸期に登録され大名の列に入ったもの

代表的なものとして三河西大平の大岡氏がある。名奉行大岡越前守に始まる。他に三河の西端の本多氏、遠州相良より奥州下村に移り相良にもどり更に上総の小久保に転じた田沼氏がある。幕末に一時大名の列に入った安房船形の平岡氏、上総貝淵(後に請西)の林氏もこれに入れられる。武功で家を興したのでなく能吏というべき人々である。

(G) その他

大政奉還後三家の付け家老や高禄の旗本で実高一万石以上のものが藩に昇格したものが幾つかある。付け家老は二万石以上だったから別として交代寄合の旗本でこの時藩主になったのは左記の如く、旧来の小藩の藩主が後に子爵になったのに対し、これ等は男爵になっている。

出羽矢島の生駒氏、常陸志筑の本堂氏、大和田原本の平野氏、但馬村岡の山名氏、備中成羽の山崎氏。

遠州堀江の大沢氏は高家であり、同じようにして藩主の地位を得たが堀江藩↓堀江県↓浜松県に合併後の明治四年十一月、旧藩主大沢基寿は太政官より「虚飾ノ高帳差出し候段、不埒ニ付士族ニ下シ禁錮一ケ年申付」けられていゝる。一万石以上あれば藩主↓華族になれるとあって地先海面・開墾見込地まで高に加えた水増しの高帳を出した事が罪に問われたのである。

將軍家の姻戚との事で鷹司家より大名になった上州吉井家も異例といえる。

三

このクラスの城下町には現在かなりの都市に成長しており、旧時にも相応の町並をもっていたものがみられる一

方、現在無名の村落であり、旧時にもほとんど都市的色彩をもたなかったものも少なくない。この差異を生んだ要因を探る一つの試みとして土族戸数と領内戸数を指標にして整理し次の図を得た。資料は明治二十四年すなわち廃藩置県直前のもの^⑥である。土族戸数をとったのは消費者としてのその多少が商工戸口の多少に影響し都市的色彩の強弱に反映すると考えたからであり、一方領域の中心としての地位の強弱が都市性の程度に影響すべく、生産力の方は一―一・五万石の同一クラスのもののみとっているので領内戸数を指標として培養地域の程度を扱ったわけである。

その集落を主体にして市制を施行しているものは□でかこみ、都市的色彩がほとんど認められないものを()で示した。後者の場合現在の市・町・村の別は論外とした。荻野山中は厚木市、吹上は栃木市にふくまれるが全く村落景観であり、六浦(横浜市金沢区)の都市的景観は近年の都市化によるもので三池(大牟田市)は炭鉱都市として、堀江(館山寺)は観光ブームによる後年の変貌によるものであるから()に入れた。伊予の新谷は地形図上では村落的に見えるが現地を見ると約百戸の商店の並ぶ街村であり、三河の西端も地形図上の感じとは違って意外に都市的である。全部の実地観察を終えていない現在、区分の不適切なものがあるやを恐れるもので、大方の御叱正をおねがいしたい。

土族五〇―一〇〇戸、領内戸数千―二千戸のクラスが一番多く二十四ヶ所を数える。この下のクラスでは土族五〇戸以下の鞆山、領内千戸以下で土族は五〇―一〇〇戸の志筑と高知新田がある。鞆山は明治四年に戸数十七、半農半漁の寒村であり^⑦、志筑は筑波山麓の農村、高知新田は新田大名で特定の居所を持たない。二十四ヶ所の内では下妻・竜ヶ崎・須坂の三ヶ所、竜ヶ崎は米津氏一・一万石の竜ヶ崎藩の存続期間はわずか四ヶ月で仙台藩飛地の中心だった時期が長い。八ヶ町をもつかなりの町場だった^⑧。須坂は百々川・松川両川の谷口集落として月九回の市が立

ち、水車動力を利用して近世には縮油・精米、明治になつては製糸業を営なみ、北国街道脇往還の宿駅でもあつたという町である。共に城下町として以外の発展要因を重視せねばならない。村落的なものは十三ヶ所（五四％）に達する。

一方群を抜いて多いのが福江で領内一・一万戸以上、士族三一六戸を数える。衆知のごとく今も昔も五島の中心都市である。本高一・二万石余だが草高は二・二万石以上ということもあるが、領内戸数で他の約五倍、士族戸数で約三倍をもっている。正租としての米は八四八五石余（草高の三七％余）だが他に雑税として一・三万両余を得ている。これは六万石余の平戸藩の雑税の二倍に近く、六万石の唐津藩の五倍以上である。内容は水産物らしいが五島藩が石高相当以上の経済力をもっていたことが推察できる。

他に領内戸数四千戸以上の足利・糸魚川・田原、士族戸数一五〇以上の七戸・黒石・小泉・清末・喜連川は清末以外はいつでも相当の町を作っていたと言える。

以上を通じて士族戸数・領内戸数の多い所は城下町も都市的であり、少ない所はこれに反するとの想定はある程度は言えるが、一面例外的なものも目につきこの要素を過大視することはできない。

四

次に考えられる要因として存続期間の長短を検討する。廃藩置県前における二万石未満の大名の城下町九十六ヶ所につき（甲）その集落を中心として市制を施行しているもの、（乙）市ではないが景観的機能的に都市的なもの、（丙）景観的機能的に村落的なものに三分すると、甲一十七、乙一四十七、丙一三十一、その他一となる。その他とは最後まで

で新田大名で特定の居所を持たなかった高知新田（山内氏）である。

もつとも都市的な甲と、もつとも村落的な丙との成立期（一万石大名城下町としての）を

A 元禄三―四年（一六九〇―一六九一）の資料^③で一万石大名の治所だったもので以後廃藩置県まで存続したもの

B 享保三年（一七一八）の資料^④、以下同右

C 文化一〇年（一八一三）の資料^⑤、以下同右

D 天保九年（一八三八）の資料^⑥、以下同右

E 右の資料にはみえないが廃藩置県時には一万石大名の治所だったもの

に分類すると左記のごとくである。

（甲）

A 結城（水野氏）、大田原（大田原氏）、須坂（堀氏）、小野（一柳氏）、綾部（九鬼氏）、福江（五島氏）、以上六ヶ所

B 足利（戸田氏）、糸魚川（松平氏）、岩村田（内藤氏）、神戸（本多氏）、小諸（牧野氏）、豊岡（京極氏）、新見（関氏）、以上七ヶ所

C 黒石（津軽氏）、下妻（井上氏）、館山（稲葉氏）、以上三ヶ所

D なし

E 竜ヶ崎（米津氏）、一ヶ所

以上甲にぞくするものにはAとB、すなわち江戸の中期（享保頃）までに成立したのが三分の二以上（十三ヶ所）

を占め、存続期間の長かったものが多く市に成長していると言い得る。Cにぞくする三ヶ所について検討すると

黒石^⑩、津軽氏が大名の列に入つたのは文化六年（一八〇九）であるが、本家より五千石を分知されて黒石に居を定めたのは明暦二年（一六五六）である。この時よりとればAになる。

下妻^⑪、大名の列に入るのは遅れたが、井上正長が下妻に居を定めたのは正徳二年（一七一二）である。

館山^{⑫⑬}、稲葉氏の館山入封は寛政三年であるが、館山市はほぼ同程度の町館山・北条が合併して成立したもの。北条は維新時には城下町ではなかったが、寛永年間より屋代・水野・遠藤諸氏が断続的に居住していた。

Eの竜ヶ崎については前に述べた。四ヶ所の検討により存続期間の長い所が多く市に成長したということが一層明らかになった。

(丙)

A 湯長谷（磐城、内藤氏）、生実（下総、森川氏）、西大路（近江、市橋氏）、狭山（河内、北条氏）、丹南（河内、高木氏）、柳生（大和、柳生氏）、芝村（大和、織田氏）、櫛羅（大和、永井氏）、岡田（備中、伊東氏）、以上九ヶ所

B 鞠山（越前、酒井氏）、一ヶ所

C 高岡（下総、井上氏）、荻野山中（相模、大久保氏）、三日市（越後、柳沢氏）、宮川（近江、堀田氏）、伯太（和泉、渡辺氏）、三草（播磨、丹羽氏）、以上六ヶ所、

D 佐野（実は植野、下野、堀田氏）、西大平（三河、大岡氏）、以上二ヶ所

E 志筑（常陸、本堂氏）、吹上（下野、有馬氏）、小久保（上総、田沼氏）、桜井（上総、滝脇氏）、三根山（越後、

牧野氏)、野村(美濃、戸田氏)、田野口(信濃、大給氏)、堀江(遠江、大沢氏)、吉見(和泉、遠藤氏)、福本(播磨、池田氏)、生坂(備中、池田氏)、浅尾(備中、蒔田氏)、千束(豊前、小笠原氏)、以上十三ヶ所

以上江戸時代前半よりのもの(AとB)一〇ヶ所に対し後半よりのもの(C・D・E)二ヶ所と後半のものが三分の二以上を占め、甲とは反対の傾向がうかがわれる。丙群中のAとB、すなわち長期にわたって存続したのに都市に成長しなかったものについて検討してみる。

まずAの九ヶ所の内、六ヶ所が畿内の諸藩なのが注目される。いわゆる先進地域の畿内では有力な商業・交通中心地が早くから成立し、一万石程度の小藩の力くらいでは手がつけられなかったことが関係していよう。たとえば奈良盆地では古都奈良や大藩の城下町郡山をはじめ丹波市・桜井・今井・高田・御所等の地方商業都市が早くから成長し、それ等の立地は古代以来の上ツ道、下ツ道、横大路等の道路に左右されている。ここでは丙群のAに入れた芝村や櫛羅はもとより、乙群に入れた小泉(片桐氏)や柳本(織田氏)も影がうすい。僅かに中街道(下ツ道)に沿い盆地中央という地の利をもつ田原本(平野氏)がやや繁栄しているのみである。大阪に近い河内の狭山や丹南も同様にみてよからう。西大路は古い商業都市日野に隣接している。柳生については「ことに江戸詰が多く、山間盆地の陣屋町といってもそれは留守宅に等しかったということと、所領の一万石が実に各地に分散し、陣屋や町屋のあった地区が必ずしも藩領の中心をなしていなかった」と藤岡謙二郎により指摘されている。

五

以上このクラスの小藩につき先ず成立事情を類別し、城下町の成長を左右する要素として士族戸数・領内戸数・存

統期間の長短との関係を検討し、土族戸数・領内戸数が多く存統期間の長いものが多く都市として成長し、これに反するものは多く村落的景観に終始したことを知ることができた。

注

- ① 拙稿 一万石大名の城下町、第一報、新地理一〇卷二号
- ② 拙稿 一万石大名の城下町、第二報、(要旨) 本会会員通信一五号
- ③ 拙稿 一万石大名の城下町、第三報その一、新地理一三卷一号
- ④ 拙稿 一万石大名の城下町、第三報その二、新地理一三卷三号
- ⑤ この問題についての先学の業績に
藤岡謙二郎、日本歴史地理序説、昭和三十七年、二五〇—二六三頁
大越勝秋、泉州伯太陣屋村の研究、地理学評論三五卷九号
市川俊介、交代寄合衆について、備中成羽山崎氏の場合、歴史教育一〇卷一二号
があり、二万石以上だが備中足守を扱った
- ⑥ 岡山大学教育学部社会科研究室、陣屋町の研究 も参考になる。
- ⑦ 伊東尾四郎 福岡県史資料一輯、昭和七年
- ⑧ 宮武外骨 府藩県制史、昭和十六年
- ⑨ 吉田常吉編 藩制一覽、郷土の歴史中国篇(昭和三十四年)所収
- ⑩ 前掲④
- ⑪ 黒崎千晴 地方的中小市場の商圏に関する一考察、新地理五卷四号
- ⑫ 伊藤郷平 須坂町における水車と工業発達の地理学的研究、内田寛一先生還暦記念地理学論文集上巻

- ⑬ 金井 円 藩政、昭和三十七年、六〇―七三頁
- ⑭ 大塚史学会編 郷土史辞典、昭和三十年、卷末二―三三頁。
- ⑮ 地方史研究協議会 地方史研究必携、昭和二十七年、一四〇―一四四頁
- ⑯ 前掲⑭
- ⑰ 安西如鳩 烏城志、一名黒石案内、大正二年
- ⑱ 埴 泉嶺 真壁郡郷土史、大正十三年
- ⑲ 石川 寛 君塚文雄 君津安房郡史、昭和三十五年
- ⑳ 千葉耀胤 館山城趾、昭和三十八年
- ㉑ 藤岡謙二郎 前掲⑤